

リアウ州沿岸部に暮らすスク・アスリの人びとの「アダット」の用法
The usage of 'adat' among the Suku Asli living on the coastal area of Riau

大澤 隆将 (金沢大学)

OSAWA Takamasa (Kanazawa University)

本研究は、リアウ州沿岸島嶼部に暮らすかつてオラン・ウタンと呼ばれ現在はスク・アスリと呼ばれる人びとの「アダット」の用法についての分析を通して、アダットが地域共同体の内部で構築されていく過程の詳細を明らかにするものである。「伝統」「慣習」「慣習法」といった語で翻訳される「アダット」は、オランダ植民地期後期に概念化され、近年では地方分権をめぐる政治運動のキーワードの一つとなっている。しかし、ここで留意されるべきは、アダットという概念の適用は 20 世紀初頭のレイデン大学の研究者の手により行われたこと、それゆえアダット概念は研究者を視座とする「分析のカテゴリー」であるということである (Brubaker 2006; Burns 1989)。結果、「アダット」の言葉を用いて意味される伝統の内容は地域や時代ごとにばらつきがあり、特に歴史的に国家の影響が及びにくい辺境で暮らす人びとの社会においては、「アダット」の意味は固定されず非常に柔軟である (Li 2000)。

スク・アスリはこうした周縁的な社会に暮らす人びとであり、事実、彼らが用いる「アダット」の意味内容は、非常に漠然とし、使用も稀である。ただし、その用法には一定の傾向があり、婚姻規則と祖先が関係する儀礼（割礼、結婚、葬儀など）がしばしば「アダット」と参照される。これに加え、近年では、結婚式で行われるダンスや歌などが「アダット」として参照され始めている。そして、「アダット」への言及は、ほぼ外部者に集落の伝統を説明する文脈に限り現れる (Osawa 2022)。

すなわち「アダット」は、祖先から受け継がれた実体的な伝統的実践やその総称というよりは、むしろ、時代、地域、文脈、状況ごとに意味内容が柔軟かつダイナミックに構築される側面を持つ。そして、スク・アスリの「アダット」の柔軟な用法は、彼らの民族的マイノリティとしての社会的なポジションを正当化する目的で展開されており、これは、彼らが伝統的な実践をめぐる国家政府と時に抵抗し時に協働している過程と見なすことができる。

Brubaker, R. (2004) *Ethnicity without Groups*. Harvard University Press. Burns, P. (1989) 'The myth of adat,' *Journal of Legal Pluralism*, 28, pp. 1–127. Li, T. M. (2000) 'Articulating indigenous identity in Indonesia: resource politics and the tribal slot,' *Comparative Studies in Society and History*, 42 (17), pp. 149–79. Osawa, T. (2022) *At the Edge of Mangrove Forest*. Kyoto University Press.